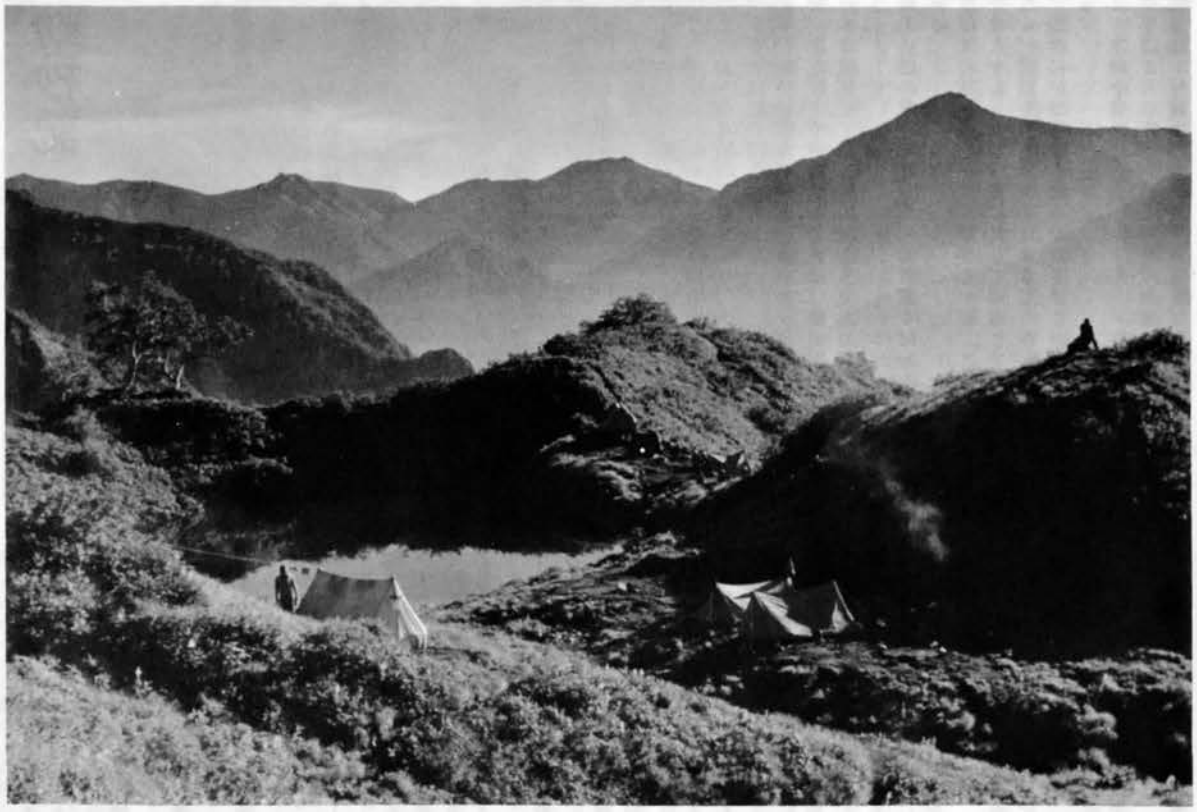
山と博物館

第21巻 第9号 1976年9月25日 大町山岳博物館



又白の池　　撮影 堀 勝彦

魚すむ川

アルプスの秀峰に抱かれ、すばらしい自然に恵まれた大町市は、天恵の地である。

この景観は昔も今も変らないが、自然は除々に変りつつある。

私の家の近くには乳川が流れている。子供の頃はイワナやアメヨをとりに行った川である。

その頃は、日本海から信濃川・さい川を遡って「サケ」が上ってきたものである。

そのサケもさい川に発電所が作られて以来姿をみせない。

また、夕方になれば「カジカガエル」の鳴き声が川面に聞かれたものである。その声も4～5年前から聞かれなくなってしまった。

不心得な人が魚を獲るために薬物を投げこんだということである。

一人の不心得者が昔からの自然をぶちこわしてしまったのである。まったく腹立だしいことである。

昨年私は仙台の奥座敷といわれる作並温泉に行き、渓谷にある露天風呂からイワナの群をみて、この自然のイワナを養殖物と思ってしまったのである。

この自然の生物を「自然のものと思えなくなっている」自分に唖然としたものである。

この本物の自然のすばらしさを目のあたりにし感激したものである。

「川には魚がすむ」という当然のことに何故感激するのだろうか。

漁業組合の釣大会が開かれ、高瀬川に養殖物のマスを放流して、その腕を競う。当然のことながら本当の釣の醍醐味はない。

「水清くして魚住まず」ではなく、水汚れて魚すまない現状を一刻も早く元の清流にしたいものである。

美しい郷土にふさわしい、魚住む川、尋ねくる観光客に本当の自然を充分楽しんでもらえるような地にしたいものと思う。

（大町市教育委員長　横沢監物）

夏山常駐隊救援活動抄記

藤原夏雄

一、フカスのこと

山には山の掟がある。人がこの掟を軽視し破った時にあの忌しい遭難に連がる。

一世の山男、小林喜作でさえ山の掟には逆らえず一命を山で終っている。

この山に年毎に訪れる登山者は増えるばかりで、その登山人口に比例して山での事故は多くなっている。

昔は登山者も少なかったが遭難事故も少なかった。

私は16歳で山に入って今日迄山を離れずにいる。私が山に入った頃の人と現在の登山者と比べると昔山を訪れた人の方が、山に親しむ心といったものが今の人と違う様に思う。

その頃の人達は山で一度逢ったばかりでも百年の知己のごとく親しみが深かった。

45年も山に親しんできた私は遭難が起る都度思うことは、なぜ憶れてきた山で命を失うとかを考えさせられる。

救出に向う隊員（北穂高）寺島一夫隊員撮影

私と同じ頃山に入り、現在もなお涸沢の岩小屋で元気で生活している人がいる。

ひと頃、涸沢天皇の異名をとった深沢正二氏である。大学の登山パーティには深く親しまれ〝フカス〟の名前を知らぬ者はないほどである。

今年も常駐隊長として涸沢に入山したら一番にたずねてくれ、昔の懐しい想い出話に花をさかせた。

深沢氏は自分を飾ることが嫌いな上、自分からはめったに人には話しかけない。しかし彼の語る一言一句は、実に適切を得たもので一語一語が生きている。

常駐隊宿舎を訪れての彼の話は、若い隊員に実によい勉強になると思っている。

彼は誰れにも彼れにも話しかけるというのではない。彼の話しかけるのは将来山を背負って立つような人柄の若者であり、チャランポランな者は話の相手にもしない。

今年も前穂で疲労凍死の遭難事故が発生した時、まだ行方不明の段階で彼は〝俺の判断では多分凍死しており、場所も多分あの辺だろう……〟

結果は彼の言と一致した。実に驚くばかりである。

私は彼の話を横で黙って聞きながら、このような人がもし全登山者に対して補導してくれたら、遭難もずい分少なくなるだろうと思う。涸沢にいつまでも健在でいてほしい人である。

二、木村小舎

今年の4月の末、突然木村君（南部地区救助部長故木村殖氏の養子）から電話がかかってきた。

いよ〳〵木村小舎も取りこわしが始まるから、小舎の最後の姿をみておいてほしいとの事であった。

27日の早朝、開山祭出席を兼ねて上高地へ向った。

木村小舎には早く着いたが、小舎の人達はすでに取りかたつけにかかっていた。

木村さんの遺影に向って線香を立てると、急に淋しさがこみ上げてきた。

伯母さんがお茶を入れてくれながら「この部屋も残してくれずに、今年中にはこわしてしまうってせ」。とポツリといった。

思えば救助隊員は出動の都度、遺影のあるこの部屋でストーブをたきながら、ふるまわれる一杯の酒で、苦しかった岩場の苦労など忘れさせてくれたことなど、想い出が次々とよみがえってきた。

新しく建てなおしても木村小舎という看板はかけてはならないとか？

古い木村小舎がなくなることが今後の救援活動に何らかの支障をきたさなければよいがと思う。

私共が出動する場合、基点は豊科署であり行動する場合、木村小舎は重要な意味をもっている。

命がけでの救援活動を終え、木村小舎に入るとほっとする。また、いやな場面など忘れ去るにもこの小舎は私達に必要であった。

私達にとっては自分の家も同じようなものであった。それが今度は近代建築のものに変るとか、しかし、私達には古い小舎の方がずっと心がやすまるのではないかと思う。

連休を間近かに控、また遭難事故がでるのではないかと思いながら、木村小舎前で記念撮影をして帰った。

三、二重遭難

連休に入ったとたん、果して遭難事故が発生した。

大天井岳での転落死、西穂高岳では滑落重傷、続いて奥穂、前穂、北穂で滑落、事故は相次ぎ隊員は各所に分散救援活動に向った。

主力は木村小舎に集結して夜遅くまで、救出方法などを協議した。

翌朝4時起床、私と他の1名の隊員が連絡要員として小舎に残り、8名は奥穂から岳沢側に転落行方不明になっている登山者を捜索するため雨の中を出発して行った。

午前11時頃、岳沢着の無線が入った。これから捜索方法を遭難者のパーティと打合せるとのことである。

その時であった。嘉門治小屋から有線で、仲間の一人が下又白谷を下降中ザイル操作を誤って、雪渓のシュルンドに落ちこんだというのである。

助けを呼ぶ声がするから、まだ生きていることは確かだから大至急救助に出動してほしいとの要請である。

シュルンドの中の冷えこみは厳しいから1時間以上中にいることは生命にかかわる。

木村隊員と相談、木村小舎に用意してある救助用具一式と無線機2台を、嘉門治小屋の遭難パーティに届け、私達は後からかけつけるからできるだけ早く先行し、救助態勢をとるよう指示し岳沢の隊員に連絡をとった。

岳沢では、行方不明者をだしたパーティが

遭難者の収容（北穂高）寺島隊員撮影

その辺かと思われる大滝の周辺を探したが発見できず、大雨で落石が多く危険この上もないとのことで、捜索に対する悲観的な意見がではじめていた頃、前穂沢で転落者を岳沢ヒュッテの従業員がヒュッテまで救出収容したが、容態が悪くなり、一刻も早く病院に収容する必要があると連絡が入った。

続発する事態に隊員は限られた数しかいない。

シュルンドの中の遭難者は一刻を争う。前穂沢の転落者を背負い下し、岳沢の捜索は後にまわすことにする。

激しい雨の中を背負い下す隊員の苦労は痛いほどわかる。岳沢出合であらかじめ連絡をとってあった安曇村の救急車に乗せる。

雨の中立ったままにぎり飯をほおばると、隊員は下又白谷へ急行した。

午前4時からの行動で隊員は疲れ切っているが、口にだす者は誰もいない。

下又白谷の入口で先発隊6名は軽装で、後発隊は荷物を持って続いた。

下又の入口で現場に無線で連絡をとると、返事は寒くて仕方がないからシュルンドからでてもよいかというのである。

木村隊員と私は驚いて無線機にどなりかえした。

「すぐに上れ！いつまでも入っていると死んでしまうぞ！ すぐに上れ！」、連続的に送信すると、「ハイ」という声は聞きとれたが、その後長いこと連絡がない。

長い間シュルンドの中に入って救出準備にそなえていたものだと驚きながら、現場の状況を知らせと送信しても返信がない。

ようやく、多分入口からと思われる一人から連絡が入った。

シュルンドの中に入った二人（李さんと清水さん）から返信がなく心配だ。救助隊はまだか。と連続的に入信がある。

あたりは暗くなり雨はますます激しく降り心配の度は増すばかりで、木村隊員と相談し事態を重くみて応援を求めるため嘉門治小屋へ引き返し、木村小舎、警察官派出所、各旅館の若者に出動要請をし、豊科署へも報告する。再び下又へ引き返す。

先発隊からの連絡では、現場には到着したものの大雨と落石でそれに暗くて思うような行動がとれないといってきた。

「これは二重三重の遭難につながるじ」木村隊員が私にいった。

私の足はガク〳〵ふるえた。朝4時から休むことなく北アで一番危険な下又白谷の大滝上部へ隊員を送っていることは、いても立ってもいられないのである。

遭難者をシバゾリで収容（奥明神沢）

この大雨でもし上部で大きな岩雪崩でもおきたら全員一発で終りである。

心はチリヂリにゆれる。この時、現場からシュルンドの中の一人が上ってきたが、後の一人は全然連絡がないとの事で、上った一人も寒くて死にそうだと伝えてきた。

私は再び嘉門治小屋に引き返し、豊科署へ電話を入れた。

署では事の重大さを知り、署長、次長、課長が電話の前に私達の報告を待っていた。

外勤課長の質問が次々と伝わってくるものの、完全な報告は現地の様子が詳しくわからないためできない。

雨の中を下又白谷へ、たきつけた火はようやく燃えはじめあたりを赤々と映していたが、空気は重苦しい。

現地からの返信がきた。救助隊全員が到着後、救出のため2名の隊員がシュルンドの中に入ったが耐えられずに上ってきた。

先に救出用につけたザイルの引き揚げ作業をはじめたが思うように進まない。

遭難者の一人を救助のため下りたもう一人も全然応答がないので、この一人も遭難したものと推定すると。心配していた二重遭難が起きたのである。

四、李君の死

救助隊は二本の下したザイルの引き揚げ作業にかかると連絡してきた後は、こちらがいくら呼び出しても応答がない。私の気持は悪い予想の方へ傾いてゆく。

隊員にもし万一の事でも起れば家族に申し訳なく気が狂いそうになる。私はじっとがまんし、消えかかる火に薪を入れ燃し続けた。

これは後でわかった事であるが、救助隊は無線機を安全な場所に掛け全員が救出作業にかかっていたため、呼ぶ声はわかるものの応答する事ができなかったとの事であった。

応援隊4名がかけつけてくれた。すでに時計は12時を過ぎていた。

現地からの応答にほっとすると同時に、私はなんでもかんでも作業を中止し、ただちに下降するよう指示した。

この上三重の遭難は出したくない。猿田副隊長からザイルをハーケンで固定して作業を打切ると報告してきた。

私は嘉門治小屋に走り豊科署へ連絡をとりまた下又へ引きかえした。

午前2時半、隊員は下ってきた。思わず涙がでた。「ありがとう。ごくろうさん」私は隊員の一人一人の手を握った。

後でわかった事であるが、救出のためシュルンドに下り遭難したのは李全文君であり、異国籍である事も知った。

私はこの李君の危険をもかえりみず、遭難者を救出するために活動した精神に頭が下った。私達救助隊の仲間でもこの話がでる時、李さんの尊い精神が何か強いものを打ち込んでくれるように思う。

敬意を表し、北アの遭難救助の歴史に大きく残したい気持である。

最後に反省として二重遭難が起った原因を探ってみると次の様な点が指摘される。

一、遭難者パーティがこの付近をよく知っていながら、ルートをあやまったという点。

二、李さんがシュルンドの中の状態を知っていて、自己の力を過信していたのではないか？ 三、救助隊の到着までに時間がかかった。四、悪天候であったこと。このうち三については、遭難事故が幾件も重なったことを考慮しなければならない。

（北ア南部救助隊長）

人と鳥 (2)

千羽晋示

四、生息環境をまもろう

これまで東京都での例をあげ、森林と鳥類との結び付、そして、生息環境の変化がおよぼす鳥類の変動についてのべてきた。

もともと、こうしたことの原因になっているのは人間であることも、改めていうまでもない。

信州大学羽田健三博士は、スキー場などができて草原化するとムクドリがすみつくとして、これらを山岳汚染の指標になる鳥類と指摘されている。

武庫川女子大学白附憲之博士は、道路建設などによる自然破壊が、ホオジロの侵入をもたらすとして、やはり一つの環境破壊の指標にされ、人里性の鳥類などをとりだし、スズメ指数、（自然の市街地化を示す）、カラス指数、（ヒトの廃棄物による汚染化を示す）ホオジロ指数、（森林の破壊による疎林化を示す）などを考えだしている。

このようにして考えられた環境の評価の方法は多いが、生物を使った指標、とくに鳥類を使っての指標的なみ方は、まだあまり多いとはいえないのである。

信州大学中村登流博士や宮尾嶽雄博士も鳥類、哺乳類を対象に、環境の評価付けをされ、自然の保護、保全を訴えられている。

ところで私たち人間は、鳥類にたいして何をしてやり、何をしてやれるのだろうか。

食物連鎖の最高位にある猛禽類のなわばりの広さは、オオタカの類で五二五エーカー、ノスリの類で三二三エーカーが必要であるといわれている。

猛禽類の種族維持に要する番の数を考えれば、広大な面積について私たちは考えなければならないことになる。

この広さが、生息環境、生息密度個体の差などと、年毎の気象条件などによってちがいは生ずるが、あの小型のシジュウカラの類でさえ二〇ヘクタールに三〇番前後が最大の量である。

また、非繁殖期であってもムクドリなどは日周行動圏として四〇キロメートルを移動するともいわれている。

生息のための最少必要面積と種族維持のための数、そして、種ごとに示す生息環境条件などを考えてみるとき、テリトリーの広い種からいなくなり、狭い種が残っている。

また、食餌内容からみれば、食虫性、肉食性といわれる動物性食餌物を主食とする種の減少がいちぢるしく、東京都内での調査からも明らかにされている。

このようにして原因をさぐれば、その源は人間に発しており、私たちに責任があることを痛感するのである。

日本の現状は、大型あるいは中型鳥類の生息できるような環境は、あまりにも少ない。

小型の鳥類であれば、都市内でもまだ回復させる手段はあるように思うが、大中型鳥類については、もはや手おくれの感じさえし、絶滅の一途をたどりつつある。

一方、どうにか生息をつづけていても、自然的食餌物をとっていたものが、人為的食餌物（人間のだした廃棄物など）に依存しはじめたこと、そうせざるをえなかった状況は、都市内のみならず高山帯にまでおよんでいるのである。

この憂うべき状態から脱出するために、とりあえず日本全土の現状凍結をし、国を中心としたレベルでの大規模な現状把握の調査を早急におこなうべきと思う。

ばらばらな施策の統一、法律の一本化など問題点は多く、複雑である。

単に鳥類だけのことでなく、私たち人間をふくめて考え、自然との調和、節度ある利用を熟考して欲しいのである。

五、おわりに

鳥と人とのかかわりあいを主にすすめてきたが、どうも主題からはずれてしまったようで、その点おわびしたい。

たしかに鳥類と人間との接触は、表面にでた形の面でも古い歴史をもっている。

しかし、現在のあまりにも人間の力が広域にまでおよび、自然の征圧が進んだ時点では、鳥類と人間だけの関係をとりあげるのが当を得ないことのように思えたのである。

人間の趣味的なカゴノトリとしての接し方などはもう論外であり、庭や身近かに鳥を…といったことも、すでにおそすぎるほど現実は進んでいるのではないだろうか。

だからといって、これまでの私たちの接し方を非難し、否定するものではない。

一九七五年三月、国際生物学事業計画自然保護分科会から政府・一般社会にたいして提言された〝自然保護に関する提言〟が、一年余を経過した現在も眠りつづけていることは、将来への不安を一層つのらせるのである。

（国立科学博物館付属自然教育園）

中央高速道と周辺の状況

博物館だより

資料ご寄贈ありがとうございました

マガモ　西神義範、イシガメ　猪腰茂、タヌキ　矢口雅斌、ノウサギ　松田健一郎、ヤマネ　佐藤岩夫、ノウサギ　工藤福治　（敬称略）

秋の自然観察会

大町市児童館と共催の自然観察会は10月1日に行われる。

参加者は9時20分までに児童館に集合、持物は、おべんとう、雨具、水とう、えんぴつおやつ、布のふくろ。

山と博物館第21巻第9号　一九七六年九月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL(2)〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）